

八月十五日(戦後七十三)年目の敗戦記念日です。七十三(経)つた今、平和憲法は危機にあります。昔の日本の姿が再び来ないと言い切れるでしょうか。

◆これは、市内中区にある「浜松復興記念館」に展示されている六・一八浜松大空襲後の市内の写真です。この時、約一千七百人の市民が亡くなったり記録に残っていないすが、この空襲は市内だけではありません。

◆近代史研究の竹内康人氏は、この空襲の記録には市周辺の犠牲者が欠落していると指摘しています。私たちは、この人たちの想像力を働かせなければなりません。死の苦しみに想像力を働かせなければなりません。

◆一方、三年前の二〇一五年の総務省の発表で、戦後生まれの人口が八割を超えたと報じられました。そして、今年は遂に九割を超えたとのことでした。

◆戦争の悲惨さを知らず、世界の宝ともいえる非戦非武装を謳った憲法九条の価値を理解できない日本人が大多数となっています。その一人が戦後生まれの安倍総理大臣です。平和憲法は今、危機にあります。

◆これは J R 浜松駅前にある浜松大空襲を生き延びた一本のプラタナスの姿です。この木は戦争の悲惨さの目撃証人（木）です。そして、平和な今の日本の姿を愛おしく見つめています。

（2018・8・7撮影）

◆最後にこのチラシの裏に「竹矢来<sup>たけやらい</sup>」という聞き慣れない題の詩を載せました。これはフイクションではない題の詩を載せました。戦争中であって、消されてしまった出来事です。どうか声に出して読み、戦争の出来事、その想像してみてください。この様な世の中が再び来ないことを願って。

浜松・平和の集いのお知らせ  
日時・場所 8月15日(水)午後2時半～ 浜松市地域情報センター  
催し 映画鑑賞「軍隊を捨てた国・コスタリカの奇跡」入場券千円  
主催 浜松・憲法九条の会  
この後、4時45分～5時45分 浜松駅北口までピースウォークします

浜松市憲法を守る会のホームページは <http://gokenhamamatsu.g.dgdg.jp/>→ **護憲浜松** で検索

竹矢来<sup>たけやらい</sup>

京<sup>きやう</sup>土竜<sup>もぐら</sup>

岡山県上房郡 山村の五月  
時ならぬエンジンの音がこだました  
運転するのは憲兵下士官  
サイドカーには憲兵大尉  
行き先は村役場

居丈高に怒鳴る大尉の前に  
村長と徴兵係とが土下座していた  
「貴様ラ！責任ヲドウ取ルノカ！」  
老村長の額から首筋に脂汗が浮き  
徴兵係は断末魔のようにケイレンした

大尉は二人の案内で一軒の家に入った  
「川上聡一ノ父ハ貴様カ！」  
コノ国賊メガ！」

父にも母にも祖父にも  
何のことか解らなかつた  
やつと理解できた時  
三人はその場に崩れた

聡一は入隊一カ月で脱走した  
連隊搜索の三日を過ぎ

事件は憲兵隊に移された  
憲兵の搜索網は二日目に追い詰めた  
断崖から身を躍らせて聡一は自殺した

勝ち誇った憲兵大尉が  
全員をにらみ回して怒鳴った  
「貴様ラコノ始末ヲドウ付ケテ

天皇陛下ニオ詫ビスルカッ！」  
不安げに覗き込む村人を  
ジロツとにらんだ大尉が一喝した

「貴様ラモ同罪ダッ！」  
戦慄が村中を突き抜けて走った

翌朝青年団総出の作業が始まった  
裏山から伐り出された孟宗竹で  
家の周囲に竹矢来が組まれた  
その外側に掛けられた大きな木札に  
墨痕鮮やかに『国賊の家』

「あの子に罪や無え  
兵隊にや向かん優しい子に育てて  
しもたウチが悪かつたんじや」  
母親の頬を涙が濡らした

「ワシヤ長生きし過ぎた  
戦争せえおこらにや乙種の男まで  
兵隊に取られるこたあなかつた」  
日露戦争に参加した祖父が嘆いた

「これじゃ学校に行けんがナ」  
当惑する弟の昭二に

母親は答えられなかつた  
「友達も迎えに来るケン」

父親が呻くように言った

「お前にやもう学校も友達もねえ  
わしらにや村も国ものうなつた」

納得しない昭二が竹矢来に近づいた時

昨日までの友達の投げる小石が飛んだ時

「国賊の子！」

女の先生がそつと顔を伏せて去った

村役場で接待を受けていた大尉は  
竹矢来の完成報告を満足して受けた

「ヨシ帰ルゾ オ前ヲ田舎モンハ  
知ルマイカラオレガ書イトイテヤツタ

アトハ署名ダケデ済ム」  
彼は一枚の便箋を残して引き揚げた

一読した村長は顔色が変わつたが  
黙つて懐に入れ、夜更けてから

竹矢来の家を訪れた

三日後川上家一同の死が確認された

昭二少年の首には母の最後の愛か  
正絹の帯揚げが巻かれていた

梁から下がった三人の中央は父親  
大きく見開かれたままの彼の目は

欄間に掛けられた天皇皇后の  
写真をにらみつけていた

三人の足元に置かれた便箋の遺書に

「不忠ノ子ヲ育テマシタ罪

一家一族ノ死ヲ以ッテ  
天皇陛下ニオ詫ビシマス」

村長は一家の戸籍原本を

焼却処分した

村には不忠の非国民は

いなかった

「ゆり根の会」(「ゆりねだより」第161号)

より転載

〔注・竹矢来<sup>たけやらい</sup>とは竹で粗く編んだ囲い。昔、  
犯罪者の処罰など見せしめの場所とした。  
作者は戦時中軍隊を経験した京都の詩人。  
二〇一一年没〕